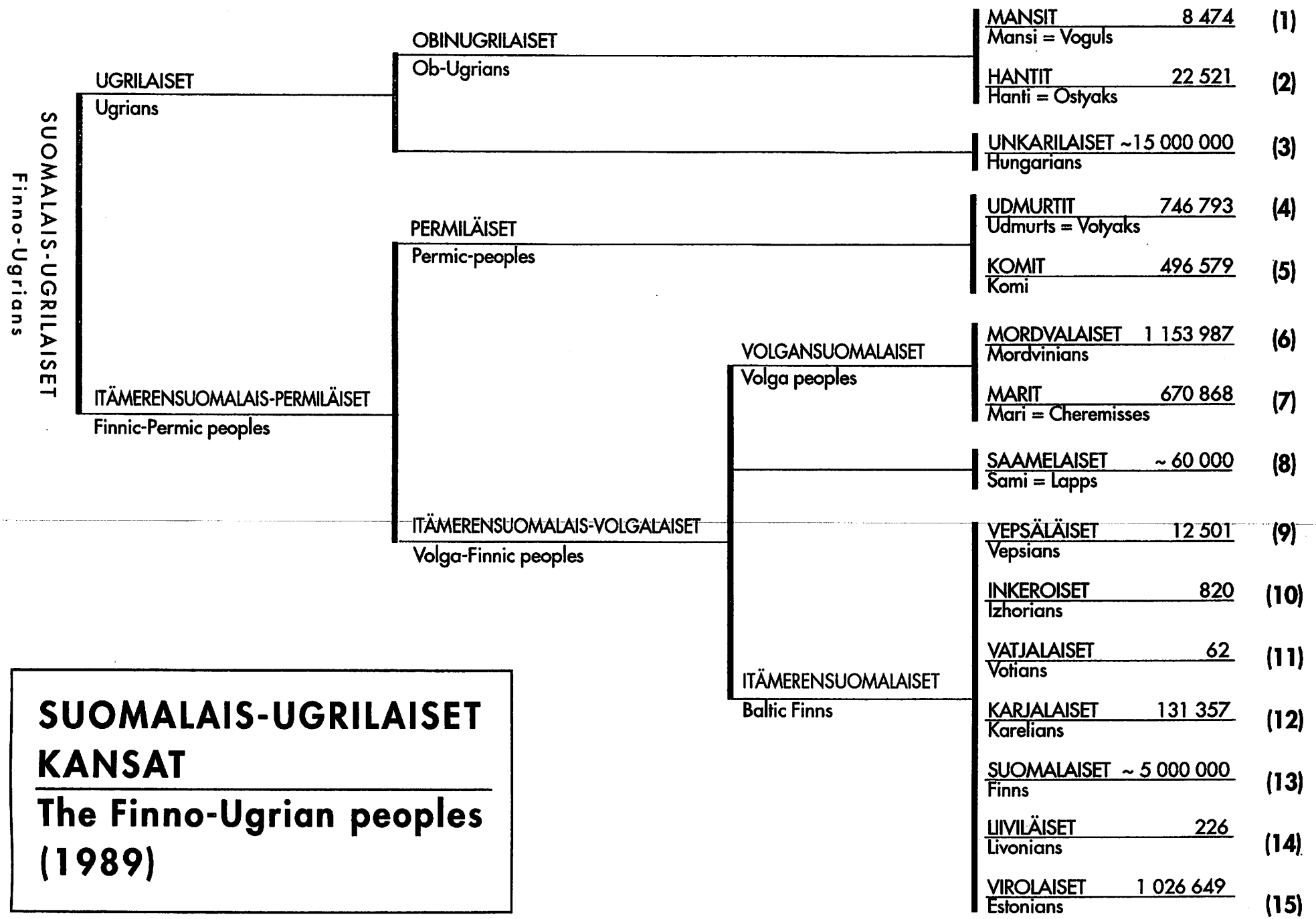
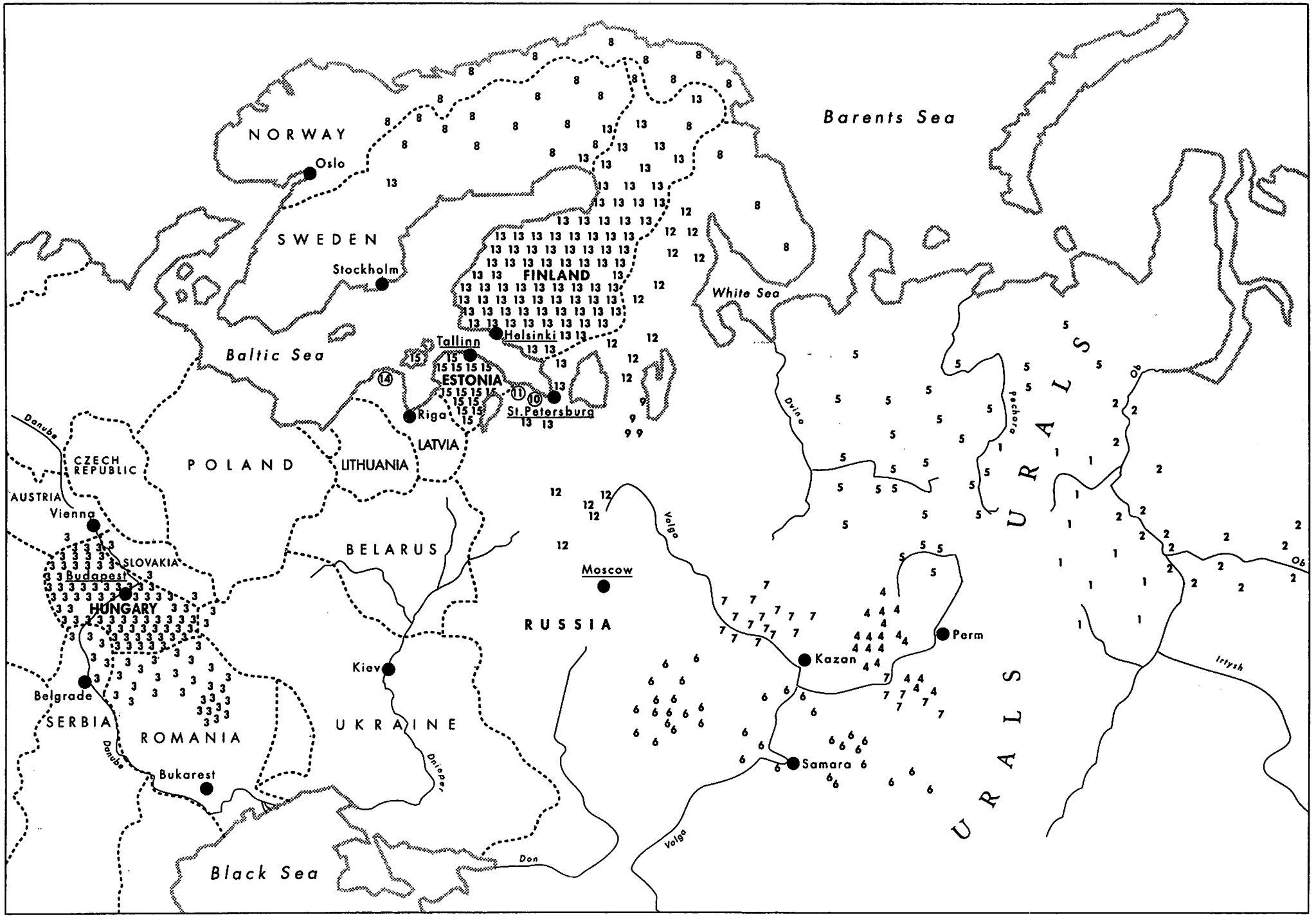
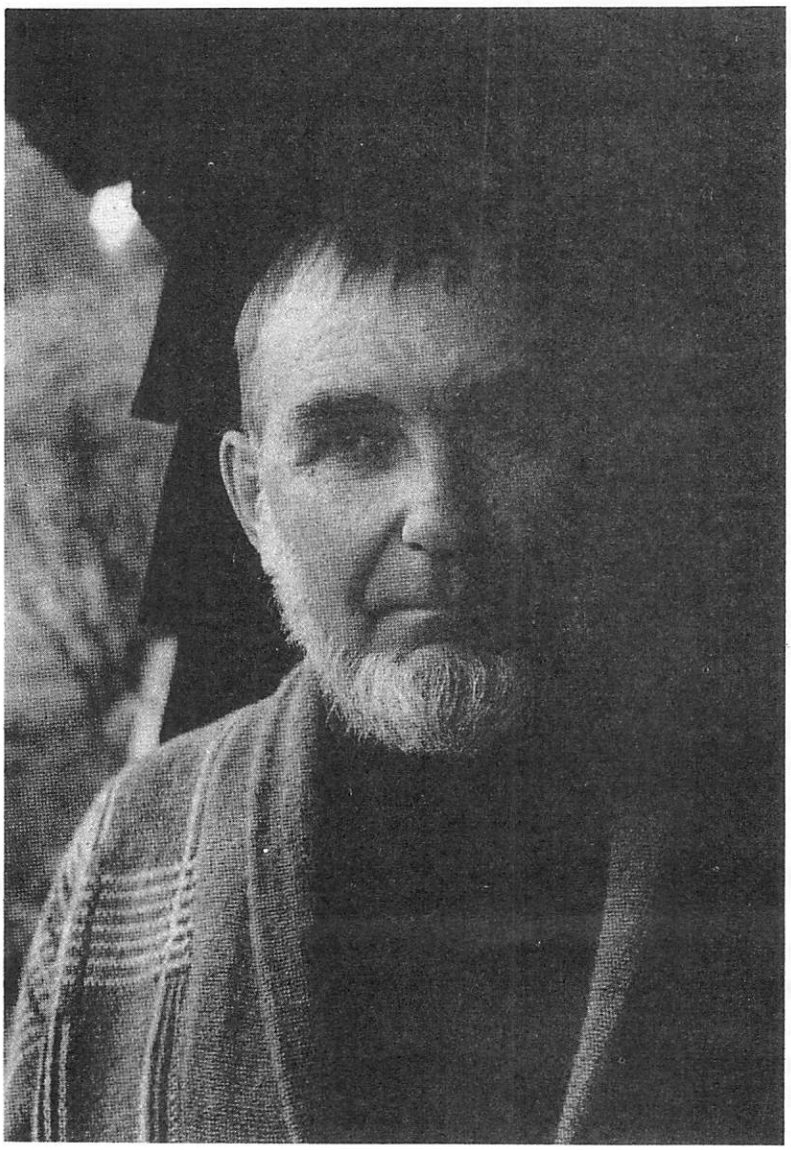


SUOMALAIS-UGRILAISET KANSAT

The Finno-Ugrian peoples (1989)


NORWAY
Oslo
SWEDEN
Stockholm
FINLAND
Helsinki
Tallinn
ESTONIA
Riga
LATVIA
LITHUANIA
St. Petersburg
Baltic Sea
Barents Sea
White Sea
Dvina
Pechora
URALS
Ob
Irtysh
Volga
Moscow
RUSSIA
Kazan
Perm
Samara
BELARUS
POLAND
CZECH REPUBLIC
AUSTRIA
Vienna
SLOVAKIA
Budapest
HUNGARY
Danube
Belgrade
SERBIA
ROMANIA
Bukarest
Kiev
UKRAINE
Dnieper
Don
Black Sea



Veljo Tormis

(1930–)

松原　千振

第５回コーラスワークショップ
in さっぽろ
1994年５月１日～３日
札幌市教育文化会館

Veljo Tormisと歌の世界

「私が民謡に興味を持ったのではなく、民謡が私を音楽の世界に引き入れ、民謡が私を使った」

トルミスは事あるごとに人々にこう語っている。エストニアというバルト海諸国の中のこの国には、私たちには考えられない程多くのメロディーが、何百年、何千年にわたって伝承されてきた。それは、単にメロディーが伝わってきたのではなく、文字が生まれ、文章が書き記されるまで、言葉ひとつひとつがメロディーの中で守られ、生活誌、戦記、政治史から恋愛、子守唄、あそび歌に至るまでメロディーにより伝えられてきた。また、戦争に出た息子の便りや、家族の思い出、村をあげての婚礼の日の様子も小さなメロディーのくり返しで保たれてきたのだった。

エストニアの人口は現在のところ約100万人である。フィン・ウゴル語属に属する彼らの民族発生の地は中央アジアと伝えられ、この語族には、ハンガリー人とフィンランド人がいる。しかし、フィンランド語とエストニア語の類似性を探求することは素人にも可能と思われるが、ハンガリー語との関わりを現代において考えることは、実に難しい。ただ、この３つの民族に共通する点は、現代においても歌が文化全体の中で実に大きな位置を占めていることである。また合唱音楽活動が盛んであることも著名な事実であり、特にエストニアにおいては５年に一度の合唱祭が示しているように、国民全体の合唱活動は、他に例を見ないほどである。

地理的に、エストニアはバルト海諸国のうちで最も北に位置し、北にフィンランド、西にスウェーデン、東はロシアに面している。したがって、政治的に実にきびしい歴史を歩んできたことは語るまでもなく、昨今の状況もそれを示していると考えられる。ところがエストニア周辺には、さらにいくつかの少数民族が存在している。リボニア人、

イスホリア人、インケリ人、カレリア人、ベプサ人等、これらの民族の中には絶滅寸前の民族もあるが、大切なことは、この人々もこれまでに幅広く深い文化を育み、そのうちのひとつが歌であったことである。リボニア人について、伝えきくところによると、現在その総数は25人ほどであるという。彼らは今日も独自の言語を持ち、生活しているが、各地に散らばってしまい、文化や言語の基本的な形態を求めることはきわめて難しい。したがって、民間に伝承された彼ら少数民族の文化を探求することはもう不可能となった部分が多い。

Veljo Tormisは1930年に現在の首都タリンに近いクーサルに生まれた。高校卒業後、タリン音楽院において教会音楽と作曲を学び、モスクワ音楽院に進んだ。作曲を中心に学び、次第に自分の国の民謡や、また、合唱音楽に関心を示していくようになった。

エストニアにおける合唱音楽に欠くことのできなかった人物はグスタフ・エルネサクスであるが、トルミスと彼の共同作業は、その後のエストニアの合唱活動をより強固で意義あるものとしていくこととなった。まず、エルネサクスの設立による国立エストニア・アカデミー男声合唱団（ＲＡＭ）はトルミスの作品の演奏に特に力を入れ、他の国には例のないほど多くの男声合唱曲を残し、男声合唱団が固有の楽器であることを示してきた。もちろんトルミス以前にも男声合唱曲は数多く存在していたが、トルミスの作品の数々は、技法的にも音楽的にも、エストニア独自の音を生み出したと言える。

1960年代の彼は、エストニアの各地方を旅し、各地に伝わる民謡、民話など形を成している歌から、小さなメロディー、歌いそこなわれたような短い旋律に至るまで、ていねいに採集した。そこにはトルミス自身も知らない言語習慣や生活範囲があり、音楽をこえる資料を得ることとなった。トルミスはこの頃（60年代後半）にエストニア・カレンダーソングという大きな曲集を完成している。作風はこの曲集をさかいに変化していく。

前述の少数民族に伝承されてきた歌の数々を採集したのはこの頃であり、トルミスは数限りないとも思われるメロディーを書き記し、それらをできる限り変化させないで無伴奏合唱曲に編曲していった。少数民族の伝承歌の数々を彼は20年以上かかって各々の民族の曲集にまとめ、それは「忘れられた人々」という全部で６つの合唱曲集となって1990年頃に完成した。この６つの曲集の中で最後になった「カレリア人の運命」は彼独自の記入が施されている。民謡という音楽には、これが正しいというものがない。トルミスは楽譜に、このうたはだれによって歌われたうたあるとか、日時なども記し、民謡の特異性を示したのだった。

民謡といって、思い出すのは、ハンガリーのベラ・バルトークとゾルタン・コダーイである。かれらとトルミスの相異は何であろうか。バルトークもコダーイも共同で民謡を採集した。田舎を歩き、村から村へ人々の間に伝わるメロディーを聴き、楽譜にしていった。ハンガリーはヨーロッパの中に位置しているが、考えていみると、民謡においては離れ島のような存在である。したがって、他のヨーロッパの民謡と相容れない部分が多い。バルトークもコダーイもこの不規則性に気づき、民謡を作曲技法に適確に生かしていった。しかし、トルミスは民謡を熱心に採集したとはいえ、原資料に対し真正な態度で向かい、決して作曲または編曲の技法を民謡そのものに問わなかったのである。その結果トルミスの合唱曲の数々は、だれにでも歌える音楽となり、エストニア人のみならず、バルト海諸国、フィンランド、スウェーデンほか、多くの国々で歌われるようになっていったのである。たとえば、バルトークの「４曲のハンガリー民謡」はハンガリー人の言を借りると、ハンガリー人以外では歌えない、となるが、果たしてそうであろうか。詳しくこの曲集のリズム、言語を見てみると、ハンガリー人の意見は正しいと思われる。すなわちち、最大の鍵は言語とリズムの関わりなのである。多くのハンガリーの合唱団の演奏を聴いて、リズムが楽譜に従っていないことに気づく。トルミスはこの点についても実に敏感であった。すなわちち、エストニアおよび周辺の言語を、吸収し、曲にするまでに長い時間をかけ、できるだけ歌いやすいリズムを形造っていくような努力をしたのである。この点において、トルミスの作品に歌いにくさはほとんど存在しない。

さて、特にコダーイは作曲家であったと共に、音楽教育者として偉大であった。トルミスは、この点においても数こそ多くはないが、実に著名な仕事をしている。たとえば「教会旋法による練習曲」は、古い音階をどのように子どもたちに教えるか、教会旋法から生まれるハーモニーはどのようなものかを示し、また、おじいさん、おばあさんから伝えられてきた話を、小さなメロディーとし、色彩豊かなハーモニーをつけ、リコーダーと共に歌っていく、といったような曲集を作ってきた。自然に対し敏感に反応するトルミスは、数々のそうした小さなうたの中に自然のすばらしさを語り、たとえ自然が失われようとする時であっても、主張を音楽の中に持たせている。

トルミスの仕事は真の意味で、民族文化の伝承を促進するものである。エストニアに生まれた彼は、われわれ他民族には想像しがたいほどの厳しい歴史、苦難の歴史をたどってきた祖先の文化を何らかの形で残し、人々に民族の独立と自由を示してきたのである。混迷のこの世界の中で、音楽もその大半は無国籍状態とも言える。そして人々の音楽に対する価値観が大きく変わりつつある現在、トルミスの存在は、極めて貴重であると思う。エストニアの合唱曲について語る人々の中には、技法的なことを常に問題とし、その技術のなさを評する場合が多くある。だが、技法の混迷の中で聴くトルミスの作品は実に新鮮であり、限りなく広い歌の世界を示している。トルミスの作品は実は単なる遺産を受け継ぐことにとどまらず、より多くの人々を合唱音楽の仲間にまねき入れ、民族の存在を認識させ、豊かなそして快い楽興の時を創造していると思う。

合唱作品リスト

作曲年代	題　　名	編　　成	言　語　名
1959	キーヌ地方の婚礼	混声	Kihmu pulmalaulud
1960	カレワラからの３曲	混声	Kolm laulu Eeposest
1962	３つの美しい言葉	男声、フルート	Kolm mul oli kaunist sõna
1963	祖国誕生の日	混声、男声、女声、児童	Kodumaa sünnipäev
1964	平坦な土地	男声	Tasase maa laul
1964−69	四季		Looduspildid
	１．秋の風景	女声	Sügismaasti kud
	２．春のスケッチ	女声	Kevadkillud
	３．冬の構図	女声	Talvemustrid
	４．夏のモチーフ	女声	Suvemotiivid
1964−65	ハムレットの歌　Ⅰ、Ⅱ	男声	Hamleti laulud Ⅰ、Ⅱ
1966	幼き頃の思い出	女声または児童	Lauliku lapsepõli
1966−67	エストニアの暦		Eesti Kalenterilaulud
	１．聖マーチン祭の歌	男声	Mardilaulud
	２．聖カタリン祭の歌	女声	Kadrilaulud
	３．懺悔（ざんげ）の火曜日	男声	Vastlalaulud
	４．スウィングソング	女声	Kiigelaulud
	５．聖ヨハネの日	混声	Jaanilaulud
1969	マリアの地	男声	Maarjamaa ballaad
1969	私たちの影	男声	Meie varjud
1969	クーサルの城	男声	Nekruti põgenemine Tallinna Toompealt ära koju Kuusalu Kilelkonda
1970	選ばれた民、リボニア人	混声	Liivlaste Pärandus
1970	民謡による練習曲集	児童または女声	Etüüdid helilaadides
1971	ヴォティック地方の婚礼のうた	混声	Vadja Pulmalaulud
1972	13曲のエストニア民謡集	混声	13 eesti lüürist rahvalaulu
1972	３曲のエストニアの遊び歌	混声	3 eesti mängulaulu
1972	鉄ののろい	混声、ドラム	Raua needmine
1973	あらしの思い出	男声	Katkuaja mälestus
1973	母の歌（３曲のエストニア民謡）	女声または児童	Emalaulud
1974	歌い手	男声	Laulja
1974	雷鳴への祈り	男声、バスドラム	Pikse litaania
1975	イスホリアのエポック	混声、ナレーター	Isuri Eepos
1975	乳しぼりの仕事	児童	Viljandi Karjapois
1976	北ロシアの民謡	男声	Põhja−vene bõliina
1977	タム島の牧者	男声、打楽器	Hääled Tammsaare Karjapõlvest
1978	我が村の鐘の音	混声、ナレーター、鐘	Tornikell minu külas
1978	３曲のブルガリアの歌	女声（児童）、男声、混声	Bulgaaria Triptühhon

1979	ユハン・リーブの風刺	男声	Juhan Liivi sarkasmid
1979	インケリ地方の夕べ	混声	Inkerin Illat
1979	古代の海	男声	Muistse mere laulud
1980	ビルの誓い	男声または混声	Viru vanne
1981	歌の橋	男声または混声または児童	Laulusild
1981	原始の歌	男声または混声、ドラム	Pärismaalase lauluke
1981	ハント・ルンメルの映像	男声または混声	Mõtisklusi Hando Runneliga
1982	ラトビア民謡集	混声	Läti burdoonlaulud
1982	５曲のエストニア舞曲集	混声	Viis eesti rahvatantsu
1982	友情のラプソディー	男声	Rahvaste sõpruse rapsoodia
1982	幼い頃の思い出	男声または混声	Helletused
1983	３つのハンガリー民謡	児童または女声	Kolm ungari rahvalaulu
1983	エストニア・スウェーデン民謡集	男声	Eesti rootsi rahvalaulud
1983	ベスピア人の道	混声	Vapsa Rajad
1983	インケリ人のバラード	混声	Ingerisoome rahvalaul
1983	２つの贈りもの	男声または混声	Kaksipühendus
1983	Hilda Cerbach−Griva の詩による３つの歌	混声	3 Hilda Cerbach−Griva laulu
1984	ワイナミョイネンの賢い言葉	男声、ピアノ	Väinämöise tarkussõnad
1984	ベスピア地方の冬	男声	Vepsa talv
1984	出兵の兵士	男声	Sõjakulleri sõit
1984	神の救い	児童または女声	Varjere, Jumala, Soasta
1985	舟旅	児童または女声	Väinämöise venesõit
1985	カレリアへの帰郷	児童または女声	Karjan kotiin kutsu
1985	カレワラ、17番目の文字	男声、民族楽器	"Kalevala" seitsmeteistkümnes runo
1986	祖父母の残したうた(29曲の学校歌集)	児童、リコーダー	Vanavanemate viisivatkk
1987	カレワラの始まり	混声	Kalvalan algus
1988	エストニアの祈り 1988	混声または男声	Ohtupalve 1988
1988	我が家の歌	混声	Lahkumine vigalast
1989	３つの星	女声	Kolm tähte(Tris zvaigznes)
1989	４つのエストニアの子守唄	混声	4 eesti Hällilaulu
1989	裏切り者の物語	男声	Ilmiantajan tarina
1986−89	カレリアの運命	混声	Karjala saatus
1990	３つのイタリア民謡	混声、児童、男声	Kolm Itaalia rahvalaul
1990	花嫁の旅立ち	混声	Morsja Hüvastijätt
1991	３人のカレリア娘	児童	Kolm Karjalan neitoa

作品リストは彼が本格的に作曲活動を始めた1950年代終わりからのものである。しかし、このリストは完全に正しいリストではない。すなわちエストニア語、英語等で作られているパンフレット、レコードまた楽譜からの合成により、小さな曲で欠けている部分がある。この点においてご了解を願いたい。